

民衆の中の「母の声」に耳を澄ます人

秋山泰則詩集『民衆の記憶』に寄せて

私は時に浅草を訪れると、雷門近くに流れる隅田川に自然と向かう。そしてなぜか吾妻橋の欄干にもたれてユリカモメが舞い、遊覧船や浚渫船が川面を切り裂き、水脈を曳いて行き交うのを眺めてしまう。いつのまにかこの場所の隣町で石炭屋を営んでいた亡くなった父母を偲んでいるのだ。と同時に、なぜかこの場所で死んでいった関東大震災や東京大空襲の犠牲者達、下町の人々はもちろんだが、この地区にいた異国の朝鮮人・中国人などの無数の魂が競り上がってくるような思いがしてくるのだ。

秋山泰則さんは一九三八年に東京の浅草に生まれ、両親は日本橋浜町で家業を営んでいたという。また戦時中には千住近くの西新井にも暮らしていたという。私は戦後に浅草の隣の南千住という下町に生まれたこともあり、秋山さんの生活圏内だったところの地理的な範囲はある程度は理解できる。しかし私と秋山さんの間には決定的な相違がある。

十九年後、大学の入学試験に落ちた弟を前にし、私は慰める言葉の代わりに、炎を反映し、赤い翼を見せていたボーイン

私はこの詩は最も深いところから汲み上げた民衆の反戦詩だと感じ入っている。山本さんの「日本人の感性と生きることに ついて」という記念講演も緊張感に溢れ、長野の詩人たちに大きな刺激を与えて終了し、二次会の懇親会になった。そこで私は簡単なスピーチを求められた。私は日本の近代詩の歴史は北村透谷と島崎藤村の二人の熱い志や友情から始まったもので、その千曲川を愛した藤村を生んだ長野県の詩人たちの詩篇をこれを機にもっと読ませてもらいたいと語った。それから私は昭和初期に詩集『エスタの町』で話題になった延岡出身の渡辺修三、後に道元を詩作に生かした潮田武雄、竹中久七、久保田彦穂(棕鳩十)たちが創刊した詩誌「リアン」に後から参加して、最後には中心的な働きをした松本の高橋玄一郎のことに触れた。戦前の弾圧にも負けずにシュールリアリズムとマルキシズムの融合を試みた後期「リアン」の高橋玄一郎の関係者に会えるかも知れないと思って今日、ここに来ましたと語った。すると懇親会の詩人たちの何名かが肯いたり、驚いたような素振りをするのを感じた。私は高橋玄一郎の関係者達が多数いるのだと理解した。

そのようなスピーチをしたおかげで、秋山さんや柳沢さつきさんを始め、高橋玄一郎の関係者達と親しく話げできた。秋山さんとは、その場で朗読した詩「戦死」の話をしたと思うが、まだ多くの作品を書き溜めていて詩集を計画しているとのことだった。私と山本さんはそれを読ませて欲しいと話した。その

グB29の話をしてやった。

昭和二十年三月十日、死ぬことだけを考え、無意識に歩いていた生き残りの流れの一つは皇居前広場、もう一つは上野駅へ、そしていまひとつの群れは、不思議な光茫をはなちながら、新宿駅へと続いていたのだった。

(「流れと群れ」より)

長編詩『炎える母』を書き残した宗左近さんと同様に秋山さんは七、八歳で東京大空襲を体験している。東京大空襲は三月十日の午前〇時七分に始まり、深川、城東、浅草地区に低高度二〇〇メートルから焼夷弾でじゅうたん爆撃をした。その夜の強風で死者は十万人以上で、東京の三分の一が焼けてしまった大空襲だった。秋山さん一家がこの夜にどのような経験をしたかは、筆舌に尽くしがたいものがあるだろう。秋山さんの詩を理解する上で、周辺に火の壁を作り逃げ道を無くし民家を焼き尽くした人類史上最大の爆撃に、米軍関係者内部からも無差別大量虐殺ではなかったか、と批判の声があつた東京大空襲の体験が決定的な意味を持つていると感じられる。

秋山さんとの出会いは、二〇〇六年十一月二十三日に開かれた「長野県詩人祭」だった。その集まりに山本十四尾さんが記念講演をするので私も同行したことがあった。秋山さんは講演の前に朗読をした四名の詩人の中の一人だった。その朗読で二篇の詩を朗読したが、その詩の一篇が「戦死」という詩だった。

ことが機縁となって今回の詩集『民衆の記憶』が誕生することになった。秋山さんは晩年の高橋玄一郎の詩誌「灰地」に参加して活躍されていたベテランの詩人だった。ただ手作りの少数私家版の詩集を除き、一九六五年に出した『流砂』以外には出版されていないとのことだった。その場で読ませていただいた秋山さんの母について書かれた連作に、私は秋山さんの家族の思いを書き記した詩篇が、戦争によって翻弄された多くの民衆の悲しみを代弁していると直観したのだった。詩集『流砂』は三二篇の詩が収録されているが、前書きを高橋玄一郎が書いている。その前書きで、「いまの松本市で、現代詩に、正面から取り組んでいる詩人で、秋山君くらい真剣に、その情念を、青春を賭けているひとは、見あたらないと思う、これはたのしいことだ。そして、君の形成する詩的世界は、さらに、広く、高く、深いひろがりをもつようになる事をのぞむものである。」と記している。高橋玄一郎は秋山さんたち「灰地」の若き詩人たちに自分のできなかった新しい詩の世界の構築を託していたのだろう。

砂漠

——高橋玄一郎氏に

私の棲む県の詩人会が温泉場の一隅で行なわれていた。胡桃の実がしきりと落ち、小川に流れている午后である。

前衛の闘魂を引き連れた年老いた詩人の話はいつか灰汁を落とし、その忠告もむしる淡々と苦難の頃を語って終った。「言語の砂漠」と自らの詩を評されたと、若者たちと語り合う姿をみながら、いつか私は全く別なことを考えていた。

私の砂漠は不毛の地でもなく、熱砂の嵐もなく、サソリも甲虫も蠢めいてはいなかった。蜃気楼の中を、めくるめく砂の輝きの中を、駱駝を交えた隊商が渺々とした果てから果てへ、紋章を染めぬいた旗を押し立てて進み、あるいは月下の地平線に一握りの葉陰をみながら、童謡の主人公が静かに沙を透かしてみつめ合っていた。

数えきれないほど私の躰は砂漠を知ったが、いかなる闘争も諦観も、それを愛することは出来なかった。

今宵、再度訪れた雨をききながら、私はその老詩人の怒りをみたと思った。煙草を喫まず、酒を嫌い、日本人九千万人の中に六十幾年を暮らしていま、一場に君臨している姿は一見してただ静かであった。

〔『流砂』の「砂漠」〕

詩集の最後から二番目に収録された「砂漠」という詩を読めば分かるとおり、秋山さん達詩のグループは高橋玄一郎の生き方を受け留めようとしていた。一九四一年の十二月の開戦の翌日に逮捕拘留された「老詩人の怒り」を秋山さんはみたという。

皮が母の手を暖め、肉が母を喜ばすのなら、ぼくは兎になりたかった。

秋山さんは母を喜ばすためなら、手を暖める毛皮にも、飢えを満たす肉になってもいいと滅私の心情を書き記している。秋山さんの想いはたぶん今の飽食、グルメの世の中では理解不能だろうが、極限の心情であることは間違いない。秋山さんの母が、異郷で自分の食を削り、子供たちに食べさせていた行為の中から、この詩が生まれてきたのであり、当時の子供たちにとって特別な思いではなかったのかも知れない。秋山さんはその意味でその時代の民衆の極限の心情を記録する詩人なのだろう。

従兄の肺病は 軍隊で無理をしたせいだといった

街の医者へ行く日には

私の家へ寄っていった

家の中へは入らず、縁側に腰をかけて

着物の中から 自分の茶碗をだした

母がその茶碗に白湯を注ぐ

従兄はそれをゆつくりと飲む

私が近付くと 近付いた分だけ離れた

母が近付いても やはり離れた

離れた分が従兄の愛で 離れた分の寂しさをこらえた事が

私達の愛であった

このことは秋山さんにとつての空襲体験の怒りと重なってくるのだろうと考えられる。この詩に関しては、三連目の砂漠の隊商への飛躍がこの詩に「言葉の砂漠」から救われていくイメージを与えている。最終連の雨の音が砂漠を潤し、シヨパンの雨垂れのような効果をあげている。若き秋山さんの詩には一読すると、高橋玄一郎を中心テーマで書き記しているようだが、読み終えた後に静かな臨場感が心に響いてくるものがある。その意味でこの詩の大きなテーマは「砂漠」や「言葉の砂漠」を辿り、それを越えた果てに、「一握りの葉陰」に憩おうとする自分の詩の仲間たちとの詩の運動体の時空間を記録したのだと言え。秋山さんたちは、戦前誰にも理解されなかった詩の運動をした高橋玄一郎の存在から、自分たちの詩の運動に流れてくる「静かな怒り」である激しい詩的情熱を受け止めたに違いない。

詩集『民衆の記憶』は三章に分かれ、四一篇の詩から成り立っている。一章の詩篇一七篇は上空襲で長野に疎開した母子たちが故郷に帰れなかった望郷の念が色濃い。異郷で苦勞している母の思いを自分のことのように感じている秋山さんは、冒頭の章題の詩「ぼくは兎になりたかった」で次のように記す。

ほんとうは、ぼくは兎は好きではなかった。

一面の草をたべて、その草だけで生きていける生き物を、羨むまえに、ぼくは憎んでいたような気がする。でも、その毛

ほどなくして従兄は死んだ

少年兵の戦死であった

屍は国旗に包まれることもなく

敬礼して見送るものもなく 焼かれた

生きている限り私達は従兄を愛し

愛し続けなければならぬ

嗚咽の中から母の声が私の体に入ってきた

〔『戦死』〕

この詩は戦争反対と声高に言わなくとも、最も雄弁に戦争の悲劇を抉りだしている詩だろう。肺病が感染らないようにする従兄の心優しい行為を、それでも近付いていこうとする身振りにいつしか読者はその場に佇んでしまう。従兄を通して、多くの家族から愛された若い兵士たちが命を捨てていったことを秋山さんは暗示させてくれる。秋山さんは「静かな愛」でありながら、「静かな怒り」をだぶらせていく一回限りの濃密な臨場感として記録している。国家のために働いた従兄のような兵士はこのように見捨てられていった事実だけを告げている。私はこの「戦死」は秋山さんの代表作になるだけでなく、多くの戦争を書いた詩群の中でも、読み継がれ語られるべき後世に残る詩だと考えている。

二十万人そここの都市での
政治参加をしくじった私には
日常生活に落ち着きをもつまでに
いささか時間を必要としていた
平素無口なYさんは
共通の友人を誘い
昼食会を計画してくれた

その日 話題は芸術が中心となった
Yさんはあまり語らず
私は詩人祭と
音楽祭の開催についての構想を
熱意をもって披瀝した
友らは静かに賛意を込めた聴き方
次を促してくれた

私には語るが必要であったのだろう
幸福な時であった
いつか必ず思い出すであろう風景であった
いつの日か
また失意に沈むことがあったなら
思い出さずにはいられないであろう

「きのうで入谷の朝顔市が終わった
今日からは浅草のほおずき市だ
いそがしいつたらありやしな
天の一角から母の声がきこえる」

このような異郷からの江戸っ子の「母の声」を想起し続けているのだろう。秋山さんにとつてそんな「母の声」はもはや肉体の一部となって甦ってくる根源的なリズムになっているかのようだ。それは「母の声」でありながら民衆の声でもあると秋山さんが確信しているからだろう。新詩集『民衆の記憶』は、母子の記憶であり同時代の民衆の心を代弁する詩集として成立している。戦争で翻弄された民衆の姿を記憶し、戦後社会でどのような思いで生きてきたかを辿るには、最良の詩集が誕生したのだと私は考えている。宗左近さんが「炎える母」と戦後を生きたように、秋山さんはこれからも民衆の中に「母の声」を響かせながら、多様な詩的活動を継続していくのだろう。

秋山さんは江戸初期に京都から全国に広がった盆踊りの原型と言われ、今は松本市にしか残っていない「ぼんぼん・青山様」(現在は県・市無形民俗文化財)の保存会を同志と立ち上げて二十年も活動している。また「松本市子供を守る会」を設立して、自ら登下校の子供たちを守るために毎日の登下校時に巡回や交通安全指導をしている。秋山さんは「民衆の記憶」を過去のも

美しいときであった

(「美しいとき」)

二章「火が燃えている」の中の詩「美しいとき」には、言い知れぬ心惹かれるものがある。秋山さんは市議会議員を四期務めていたという。この詩は落選した失意の心情を書いているのだが、じつはそのことよって得られた「美しいとき」を何にも代え難い宝物のような友との時間を発見した喜びに満ちている。秋山さんの失意の言葉をただ黙って聞いてくれた友人たちの友情が行間に溢れている。このような友愛に満ちた詩もまた貴重だ。秋山さんの詩的精神は、たぶんこの共に同時代を生きてきた喜びや悲しみの共通経験を語らずにはいられないところにあるのだろう。秋山さんはその意味で高橋玄一郎や母から孤立を恐れない本来的な志や思いを貫くことを学んだが、それと同時に友が自分にくれたように、他者を活かす行為の意味をうけとめ、自分も他者にそれを実践しようと考えている。秋山さんにとつて「美ヶ原高原詩人祭」を計画実行したり、詩誌「松本詩集」を編集したりすることは、地域のために政治活動も続けていることと等価である詩的な活動なのだ。「ぼくは鬼になりたかった」という自己を超えたもつと大きな人間愛を信じているからだろう。そこに至るためには詩「母の声」に耳を澄まし続けることが秋山さんにとつて最も大切なことなのだ。

のとしているのではなく、今をより良く生きるために未来に投げかけている。その詩的精神は最後に引用する「あした天気にな」で語られているように宮沢賢治の理想が内在化されて深く息づいているのだ。

世界中の草をたべて、世界中の腹をすかせた人達に、ぼくの乳をのませてやりたかった。ほんとうに、そのようなものになりたかった。そして最後に死んだら、ぼくの肉をたべてもらおう。ぼくのほかには、もう腹をすかす人は一人もいらな
い。

(「あした天気にな」より)